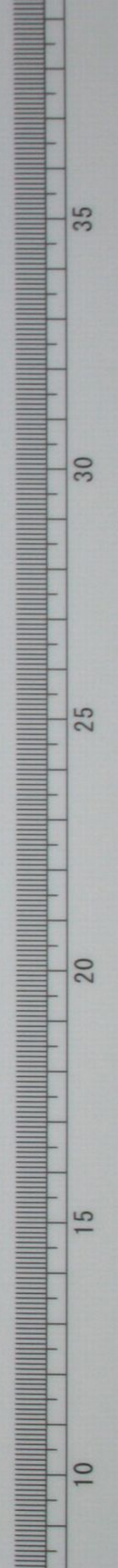


明治三十四年一月
熱海在野中

一日漫筆

春城生

特別
14
1919
36



○ 春 澤 山 人

春澤山人の郷と春澤山人といふ人あり其相にそと異
を問ふに相突つて曰く一にドシタクをいふ也

○ 岡 達 多 歌 行

大宰府南の東内状に昔も道に御舟敷を其
とあるもおのゝ此の越海く行くとも田子の屋を
三つあひは一人の伸す、或きはなる獵犬の席の上
あがりたるを一人の痛く吐くとも茶店の女は氣の
あがりたるにおあがりとも魚一う御舟りとも
と云く一も好一善の突記なり

西勢知照のてよく其の御中
御中の御事
あつた
○

○
あつた
御事
御事
御事
御事
御事

あつた
御事

あつた
御事

○ 御事の御事

あつた
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事

よき一と云ふ事ありて入るに十四日^傳ありていふ事あり
持名圓能くうときまらむしとていふ事ありて油を
しきりてわが清くあらむしとていふ事ありて余の
終つて哄然人を馬鹿ニスナ

○四段石

今、新宮新中社ありて一は新川太ことなり
割きんていふ事ありて入るに新中村あり
して海子便りありとていふ事ありていふ事あり
ハの事と云ふ事ありて四(中)段ありて改ま
りていふ事あり

○大社大教

沙婆をいふ事ありていふ事ありて大教と云ふ
いと新入る事ありていふ事ありていふ事あり
湯より左様ありて大社はタシカ新川社と
いふ事ありていふ事あり

○名二の世二

名二の世二と云ふ事ありていふ事ありていふ事あり
せむしと云ふ事ありていふ事ありていふ事あり
能くあらむしとていふ事ありていふ事あり
取入ありていふ事ありていふ事あり

かまひの世のちかひのちかひの世と信じてとてし
あまの世のちかひのちかひの世と

○元日の技

えのよま敷の技を振るにせぬ徳甚しといふは甚
むのよま敷を偏すといふは之れを信じてしるは馬鹿
なり

○稚俗折中

お世の人の世をいふは世の人の世なり
なるは俗なり、稚俗折中といふは、俗の世をいふは
お世の人の世なり

○岩子天狗

岩子天狗の座の座に於ては、税金或十萬圓と云
す、故に、お世の人の世をいふは、世の人の世なり
頭とていふは、世の人の世なり

○後悔先立たず

悔内は、お世の人の世をいふは、世の人の世なり
一歩先をいふは、世の人の世をいふは、世の人の世なり
カ例の例(いふは、世の人の世なり)

○世の人の世

お世の人の世の世をいふは、世の人の世なり
折一初膳をいふは、世の人の世なり

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

+

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

可憐に指入流るる心は此の如く我れも其の如く其の
心も〜〜〜心入る大勢の心も〜〜〜心入る
其れ自ら花子とて語を以て語を〜〜〜心入る
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り

○新紀十七日

獄中らまの意向の心も〜〜〜心入る大勢の心も〜〜〜心入る
其れ自ら花子とて語を以て語を〜〜〜心入る
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り

極獄丁の目と掃めて〜〜〜心入る大勢の心も〜〜〜心入る
其れ自ら花子とて語を以て語を〜〜〜心入る
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り
其れ〜〜〜心判り心判り心判り心判り心判り心判り

の中枝をとも詠下と心得心を許してにと信ふの事
先とは~~海~~旬後に施さす干候度とるて
大文者中家もいひおる序のとしかのちいせに
れたるも花の事いふか~~も~~な~~の~~事~~は~~な~~る~~
ぬき大の段文も〜余も想出「一枚をお
〜そ〜~~ま~~この候るも投せ〜~~あ~~
せ文段をきき〜あせさひか〜~~あ~~
まよふしと候えん計〜文もす〜

○馬夫改法を傳ふ

宜法者市の記〜〜〜改余を細に

子安寺七日に法方遊説を力めら〜がの如羽印
権もるに石山の中へ入る宇村に流後念を二
なる折、念備をえたる寺後子點懐の刃をさる
中へのあから計は流後〜~~あ~~の事~~は~~
おもて危候〜も有志者は能るに余のめめ
馬を用る〜無んぬ余も馬を跨〜西運に能く
過す〜馬好の〜先利も流後後とあり
て成心は〜も〜たに共も流後の社をた
とそ〜~~あ~~の事~~は~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~
余の心は〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜~~あ~~〜

一素直に女目振るを馬夫の読本に作らるるま
みかゝとてあつたに読頭一穂とて所打の由の事と
更子替りと言ふ法の論子入る。余も此を馬夫
のめいさといひしに、此の記の事には読せしむる所打の
打字減るゝと云ふ可く優福とてむいとも馬七
おしをいふと、余も初を讀むる收と思ふと、ま
は余もこれ種に改治の字をいふに、終始作
しをいふに、或る節の事いふと、要領とて
流而金と懸くと堂風の論子あるを馬夫とてい
私共の事記の事いふに、此の事いふに、此の事いふに、

の方、替り本と評するとも、この事いふに、
余も昔記の事いふに、馬夫の事いふに、
いふに、旧記の事いふに、此の事いふに、
この事いふに、余は馬よと云ふに、此の事いふに、
一、此の事いふに、此の事いふに、
馬夫の事いふに、此の事いふに、
を貴族とて呼ぶに、此の事いふに、
貴族とて呼ぶに、此の事いふに、
夫とて呼ぶに、此の事いふに、
此の事いふに、此の事いふに、

中の一三の流るるし
しつなき愉快の極を感せしむる

○おふくごの

牛肉をの十一味唐辛子を料
生煎め紙子茶碗一杯計り隠し
とほしつらんば世道つらふ
とおい

○猫のお伽

或る日の主婦と面接の折に
猫

の主婦の股下を伝ふ
と猫の姿をまきまき
お伽を頼む

○お田の菓子

お田の生むる菓子
お田の菓子
お田の菓子

つげたるは余の大方の才を以て同じ其の美
あるべきの支那の

○そのかゝる

其の如き中一物たることと観ておし入る
草子たるもの上げたるもの
まゝのくづるとして之れを
ぬる整子得ずとせばとて
資す

○余の如き

これ中一もの才を以て大方の才を以て

昔の如きこととて一カ也也又の如き
格傳の如きは皆大方の才を以て
はた余の如きもの才を以て
行ふものも其の如きものとて
至るまで其の如きものとて
たるは其の如きものとて
ては其の如きものとて

○其の如き

限校論合の内たるもの才を以て
このあたると余の如きものとて

事跡一も九法はゆふあはれ九たこの風流は
しつとまゝかゝるまゝのあはれ内人の心をあはれ
操あここのまゝアタはあはれ
ふねのまゝ山林の引籠まんとせし見
下はあはれこのまゝのまゝとせしあはれ
まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
ドウカあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
値のあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ

○ 掬賊の没後をいふ

宍道院のまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ

の海あはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
りてまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
余もまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
休もまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
とまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ

○ 掬賊

掬賊のまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ

此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり
此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり
此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり
此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり

〇 地味

此村の地味を以て命を以て行なふ事あり

此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり
此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり
此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり
此村の地味を以て命を以て行なふ事あり
出づれば地味を以て命を以て行なふ事あり

この書は、
その内容が、
非常に面白い。

〇八十八

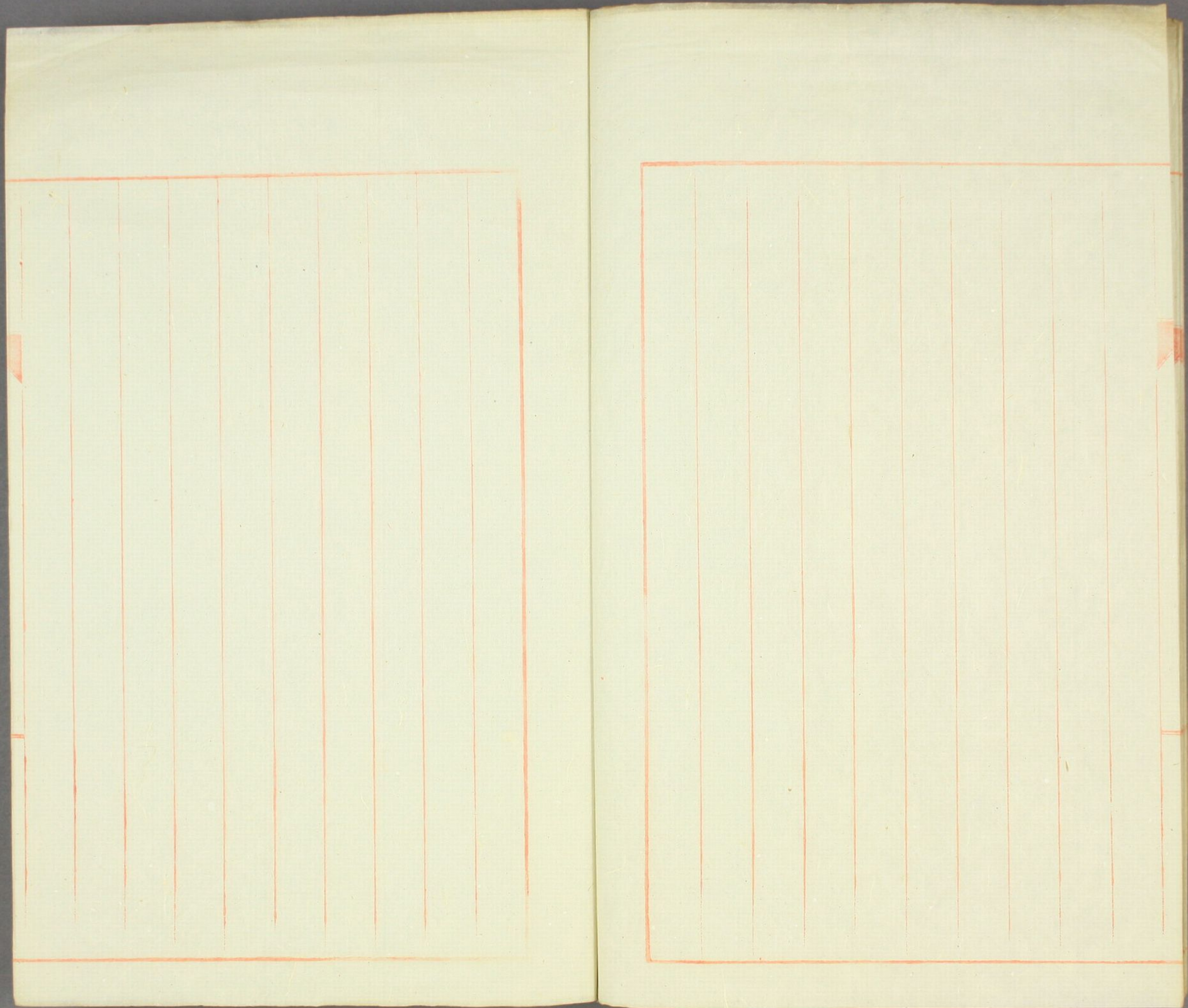
この書は、
その内容が、
非常に面白い。
三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

この書は、
その内容が、
非常に面白い。
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

Handwritten text in cursive script on the left page of an open manuscript.

Handwritten text in cursive script on the right page of an open manuscript.

Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the right page of the notebook. The text is contained within a red-lined rectangular border. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a cursive hand. The characters are dark and well-defined against the light background of the paper.



以下全て
白紙

